

アチェ津波モバイル博物館

山本 博之 京都大学地域研究統合情報センター



今日は津波モバイル博物館についてお話しさせていただきますが、それに先立って、このワークショップの企画者の1人として少しお話しさせていただきます。

これは国際ワークショップです。ふつう、国際ワークショップなら英語を使うと思うかもしれませんが、しかし、この国際ワークショップでは、英語ではなく日本語とインドネシア語で行なうことにしました。その理由について最初にお話ししたいと思います。

■ 災害対応研究の先頭を進むべき 日本とインドネシア

私たちはこれまでに、日本とインドネシアの協力のために英語でワークショップを行なうこともしばしばありましたが、形式ばかり重視されて、実際に伝えたいことを実際に伝えたい人とのあいだで話しにくいという経験がありました。

ここでちょっと考えてみてください。津波のことを英語で何と言うのでしょうか。「tsunami」です。これは日本語から来ています。では、ラハールのことを英語で何と言うのでしょうか。これも「lahar」で、インドネシア語から来ています。日本語とインドネシア語で災害を表す言葉が英語でもそのまま使われています。

このことは、日本とインドネシアが災害に対応してきた経験をとてもたくさん持っていることを示しています。しかも、2004年のインドネシアの津波、そして2011年の日本の津波を経験して、災害で苦しんだ経験だけでなく、災害に対応し、復興する経験も重ねてきています。そのため、災害対応、とりわけ地震と津波においては日本とインドネシアの経験が世界の手本となりうるのであって、そのため災害対応研究においては日本語とインドネシア語が中心的な言葉となるべきだと私たちは考えてきました。そのため、このワークショップはぜひ日本語とインドネシア語で行いたいと思いました。

今日のワークショップの参加者には、インドネシア語がわかるインドネシア地域研究の専門家がいます。

私が話すのはインドネシア語ではなくマレーシア語ですが、インドネシア語を話す人と言えば、西芳実さんのほかに、浜元聡子さん、服部美奈さん、亀山恵理子さんと何人もいます。ワークショップの休憩時間などにいろいろな人をつかまえて話をしてみてください。この場を大いに利用して話す機会にしてもらえればと思います。インドネシア語を話さない人たちにも、インドネシア語がわかる人たちを通じていろいろな質問をしてもらえればと思います。

それでは、私たちがシアクアラ大学の津波防災研究センター(TDMRC)と協力してつくってきた防災マッピング・システムの応用を考えるにあたって、まず実物をアチェのみなさんに見ていただいて、それをどのように活用していくかをアチェの方々といっしょに考えたいと思います。

■ 災害の現場から離れた場所で入手できる情報の有用性

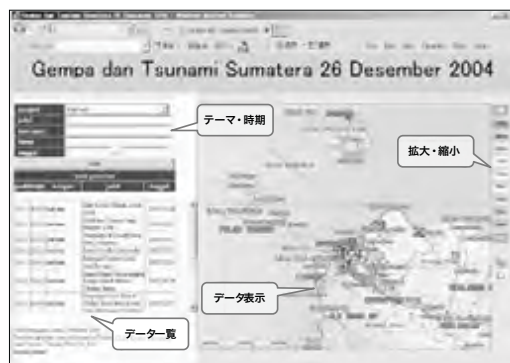
災害のときには、水、薬、食べ物などとともに情報もとても重要です。みなさんは現場に行けば情報が手に入ると思うかもしれませんが、現場に行ってしまうと情報はあまり手に入りません。あるいは、情報がたくさんありすぎてよくわからなくなります。現場から少し離れたところで得られる情報から全体像を把握することが必要です。

資料3-1の地図は2007年のベンクル地震のときのもので、この地震のとき、日本語の情報はほとんどありませんでしたし、英語の情報を探してもほとんど出てきませんでした。そこで私たちは、インターネットを通じてインドネシア語のオンライン新聞の情報を集めて、それぞれの記事を地図上に置いていきました。そうすると、地図の上で、どのあたりにどんな出来事が起こっていて、どのあたりが被害の大きい地域かがわかってきます。

地震発生から24時間以内に得られた情報を地図で表示したのが資料3-1の地図です。英語の情報はほと



資料3-1 災害情報マッピング



資料3-2 津波モバイル博物館

<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/>

んど出てきませんでしたが、インドネシア語の情報ならかなりのことがわかりますし、それを地図に載せると概要が一目でわかります。

問題は、インドネシア語の記事を一つ一つ読んで場所を調べて、それを地図上に載せる作業を短期間にしなければならないことです。土地勘があれば比較的容易かもしれませんが、そうでなければそれぞれの記事が地図上のどの地点のものなのかを探すのに苦労します。

■ 新聞のオンライン記事をプロットするマッピング・システム

そこで私たちがつくったのが資料3-2のようなマッピング・システムです。これは、インドネシアの新聞社のオンライン記事を地図上で表現するもので、記事を収集し、日付と内容で分類して地図上に紐つけるところまで自動で行うシステムです。

このシステムはインターネット上で公開されています。この窓がテーマで、いまは「bantuan(支援)」と入っていますが、その他に被害などいろいろな種類があります。テーマを決めて検索すると、下に登録情報の一覧が出てきます。右側は地図で、拡大・縮小できます。拡大すると、バンダアチェの中央モスクがここにあって、いま私たちがいるエルメス・ホテルはこのあたりにあります。

地図上に何か所かカメラと新聞の絵があります。カメラはその地点に関係した写真があることを、新聞はその地点に関係した新聞記事があることを示しています。地図上で位置が示されているので、どこにどんな情報があるかが一目でわかります。地図上のカメラや新聞の絵をクリックすると、実際に写真や新聞記事が出てきます。このように、災害に関する新聞記事や写真などの情報を集めて地図上で表現するマッピング・システムをつくりました。

いまお見せしたのは2004年の津波に関する情報ですが、過去の出来事だけでなく、現在起こっている出来事についても毎日情報を集めています。ただし、記事を読んで、その場所がどこかを調べて、一つひとつの記事を地図の上に載せるのはたいへんなので、自動化したいと考えています。その方法についてはこのワークショップで明日以降にみなさんと考えることになると思います。

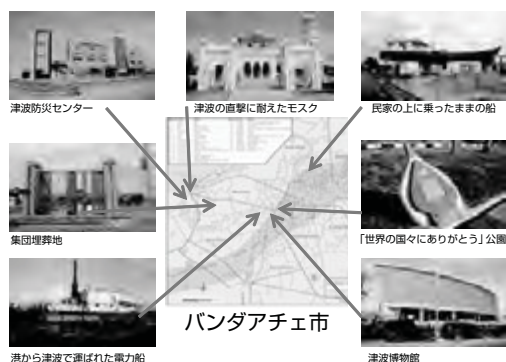
■ アチェの災害とまちの姿 時間の流れのなかで捉えるモバイル博物館

これからモバイル博物館についてお話しします。これは、いま見ていただいた災害地域情報のマッピング・システムの応用方法の一つで、ツーリズムへの応用を試みたものです。

バンダアチェには津波の遺物や痕跡がたくさんあります。それをどこか一か所に集めて博物館をつくるのではなく、それぞれがいまある場所に置いたまま、人々の生活のなかに置いたままバンダアチェの町全体を博物館にしてしまうという考え方です。開かれた博物館なので「オープン博物館」と言ってもよいのですが、携帯電話などのモバイル端末を使うために「モバイル博物館」と呼んではどうかと考えています。

モバイル博物館では、インターネット上の仮想のバンダアチェ市を作り、そこに津波の遺物や痕跡を配置するというでもあります。これによりアチェを訪れなくてもアチェの様子を見ることができ、アチェを訪れようとする人が増えることが期待されますし、実際にアチェを訪れた人たちが自分たちがいまいる場所の情報をその場で得られることにもなります。

このように言うと、「バンダアチェの町にある津波の遺物や痕跡の前に看板を立てるだけでいいではないか」と思うかもしれません。それも一つのアイデアですが、それに加えて、その遺物や痕跡や風景がいま



資料3-3 モバイル博物館構想



資料3-4 津波で流された船が屋根に乗った家
(2006年12月)

どう見えるかだけではなく、1年前にどう見えていたか、3年前にはどう見えていたか、津波直後はどうだったか、さらに津波の前はどうだったかといった情報も提供できるし、その場所に関する文献資料や人々のコメントをあわせて総合的に示すこともできます。そうすることで、いま目の前にある姿だけでなく、それを時間の流れの中において捉えることができます。町に看板を立てるだけのオープン博物館とは違うモバイル博物館の意義はここにあります。

■ アチェを開かれた博物館にするには「物語」を添える必要がある

バンダアチェをモバイル博物館とすることを考える上で、重要だと思うことが三つあります。一つは、津波の遺物や痕跡を含めた文物を社会から切りとってもってくるのではなく、社会のなかに置いたまま、生きたままの博物館にすることです。

二つめに、世界の人びとは、津波からの復興を遂げ、津波を契機に社会が変わってきたことにとっても関心をもっています。津波モバイル博物館は、アチェが世界の人びととどのような社会をつくってきたのかをいっしょに考える場にできます。津波モバイル博物館は一度つくったらそれでおしまいではなく、継続して更新されていくことで、継続して考えていく試みでもあります。

三つめに、ツーリズムのターゲットとするとき、地元の人たちが「これはユニークだ、おもしろい」と言っているだけでは不十分で、外の世界の人たちが「これはよい」と思えるものでなければなりません。そのためには、ツーリズムのターゲットに、外の世界の人びとが見てわかるように「物語」を添えていく必要があります。それは地元の人たちが出すだけでは不十分で、地元の人と外の世界の人とがいっしょに考える必要があります。今日はその例をいくつかお見せして、



資料3-5 津波で陸に運ばれた巨大電力船

いっしょに考えるきっかけにしたいと思います。

■ 津波の痕跡の記録と利用 ——民家の上に乗った家、巨大電力船

資料3-4は、津波に運ばれて民家の上に載ってしまった船です。2006年12月には写真のようでしたが、2007年ごろから民家のまわりを整えて、柵をつくり、ちょっとした博物館風にされています。現在でも、訪れれば見るすることができます。これは津波の痕跡の記録です。津波を利用したツーリズムというと、みなさんこのようなものをイメージするのではないかと思います。

津波の痕跡には、資料3-5のようなものもあります。大きな電力船が津波で内陸に運ばれたものです。あまりに大きくて撤去できず、その場に置いたまま津波の威力を示すものとなっていますが、津波の痕跡としてよく知られており、多くの人が訪れるので、いろいろなかたちで使われています。2005年の12月には地元の人たちが募金箱を置いて募金を呼びかけていました。2006年には津波被害の写真を置いて展示会をしていました。2008年に行くと魚や野菜の市場ができていました。このようにいろいろなかたちで使われています。これは、文字通りの津波の遺物で、それが町の



資料3-6 「世界の国々にありがとう」公園



資料3-7 シアクアラの墓所

中であって人々に使われている例です。

電力船はあまりにも大きくて撤去できないので、まわり一帯を囲って公園にしています。電力船を背景にして記念写真が撮れるようになっており、津波直後の写真も展示されています。津波ツーリズムといたらこのようなものを思い浮かべるのではないのでしょうか。

■ 津波によってアチェの位置づけを再確認した「世界の国々にありがとう」公園

資料3-6は「世界の国々にありがとう」公園という名前の公園です。津波が起こったとき、日曜日の早朝にこの公園に集まって体操していた人たちが、バンダアチェ市長を含めてみなさん亡くなった場所です。

この公園の隅には津波の前から飛行機が置かれています。この飛行機はインドネシアがオランダからの独立戦争を戦っていたときにアチェがインドネシア共和国に寄付したもので、この飛行機によってインドネシアは外部世界と連絡を取ることができた重要な役割を果たしたものです。アチェがインドネシア独立の重要な礎となった、特に外部世界との繋がり面で助けになったという点は、アチェの位置をよく示すものだと思います。西芳実さんがちょうどその時代のアチェの位置づけについてご専門にしていますので、さらに詳しいお話を知りたい人は西さんに尋ねてみてください。

この飛行機の隣に津波後に新しい記念碑が建てられています。四つの面があって、それぞれの面にアラビア文字(ジャウィ)、中国語(漢字)、ヨーロッパ(英語)、インドネシア語で説明が書かれています。この四つの文字の頭文字をつなげると、アラビアの a、中国の c、英語の e、そしてインドネシアはかつて東インドと呼ばれていたので h とすると、「ACEH」すなわち「アチェ」になっています。これは実は多少こじつけで、もともとは、アチェはかつて東西交易の結節点として栄

えた土地で、そこにはアラブ(Arab)、中国(Cina)、ヨーロッパ(Eropah)、インド(Hindia)といった世界各地から人々が集まっており、だからこの土地はACEHと名付けられたのだという言い方があります。

Acehというのは新綴りで、かつてはAtjehと綴られていたことを考えると、この説自体は後から作った話のようですが、アチェの人々が自分たちを世界の中に位置づけて捉えていることがよく表れている言い方です。今回この公園に建てられた4面の塔とAcehの名前の由来を結びつけるのはやや強引なところがありますが、そのように語ることでアチェの外から来た人たちが関心を持ちやすくなるのではないかと思います。

この公園には、ジョギング用のトラックを整備して、そのまわりに舟形のモニュメントが作られています。1つ1つのモニュメントには、アチェの津波後の救援と復興を支援してくれた国々の国旗をつけて、それぞれの国の言葉で「ありがとう」と「平和」と書いてあります。アチェの人々はこの公園でジョギングしながら、モニュメントを通り過ぎるたびに、「日本から支援があった」、「マレーシアからも支援があった」と思い、心の中でそれぞれの国の言葉で感謝するという仕組みになっています。この公園はもともと別の名前があったのですが、このモニュメントが作られて、「世界の国々にありがとう」公園という名前がつけられました。津波博物館のすぐ隣にあって、毎日夕方になると人々がジョギングしています。

■ 津波を契機に位置づけが変わった遺物も観光の対象に

これまで紹介したものは津波に直接関係しているものでした。次に紹介するいくつかは、津波とは直接関係ありませんが、津波を契機に社会のなかでの位置づけがかわったものです。

資料3-7は、シアクアラというイスラム教の聖人と



資料3-8 トルコ人墓地



資料3-10 アチェ州立博物館



資料3-9 津波の被害を受けたアチェ歴史資料館



資料3-11 台湾の支援による復興住宅

その弟子たちの墓所です。これはまさに海岸ぎりぎりのところに置かれていて、津波の直撃を受けて、弟子たちの墓石はばらばらになりましたが、シアクアラの墓だけは壊れずに残りました。霊験あらたかということで津波後に多くの人が訪れています。マレーシアからの救援部隊も、アチェ到着後にまずシアクアラの墓所にお参りしたようです。現在では墓所として整備されています。

これは、津波に直接関係ないけれど、津波をきっかけにして再発見された、あるいは社会における位置づけが再確認された例だと言えます。私はこのようなものも津波ツーリズムの対象だと思いますが、アチェのみなさんはこれを津波ツーリズムの対象と言ったらどう思うでしょうか。

ツーリズムに入るか入らないかという例はほかにもあります。資料3-8は、トルコ人墓地です。かつてアチェはトルコと緊密な関係があり、トルコの人々が住んでいました。その墓地が津波で被害を受け、津波後にトルコの支援団体が中心になって墓地を再建するとともに、付近の住宅とモスクを再建しました。

■ 地域に関する情報拠点の再生 ——歴史資料館、州立図書館

バンダアチェ市内の情報拠点としては、津波で大きな被害を受けたアチェ州立図書館や文書館、そして歴史資料館があります。歴史資料館は「世界の国々にありがとう」公園のすぐ隣にあって、津波で建物が全壊してしまい、アチェの歴史に関する資料がすべて失われてしまいましたが、ようやく建物が再建されたところです。

これらの施設は、アチェの人々が世界の中の自分たちの位置づけを確認するために歴史文書や文献を整理しているところであり、それが津波の被害を受けて情報が失われた後でアチェの歴史をどうやって再構成するのかにとっても関心があり、世界にとっても意義があると思うので、私は津波ツーリズムでぜひ訪れるべき場所だと思うのですが、アチェの人々はこれが津波ツーリズムの対象だと言われたらどう思うでしょうか。

これらのほかに、内陸部にあって津波の被害は直接受けませんでしたが、アチェ州立博物館もあります(資料3-10)。



資料3-12 コカ・コーラ社が再建した小学校



資料3-13 ホンダが建てた診療所

■ 世界からの支援を象徴する建物は 災害復興を考えるヒントになりえる

アチェの復興過程の特徴は、世界各国から支援団体が入って大規模な支援活動が行われたことです。そのことは支援国別の復興住宅によく表れています。バンダアチェ市内や郊外には、支援した国や団体ごとに住宅の形や色が違う復興住宅地がいくつも作られています。資料3-11のように、中国、台湾、トルコなどの支援団体が作ったそれぞれ特徴がある復興住宅地があります。これらの復興住宅はアチェが外部社会から支援を受けて復興したことを示すものですし、将来起こるかもしれない別の土地での災害からの復興に対するヒントになるかもしれないので、私は津波ツーリズムの対象に入れてはどうかと思いますが、アチェの人々はどうか考えるでしょうか。

外の世界から支援を受けてアチェが復興したことをよく示す別の例として興味深いと思うものをいくつか紹介します。資料3-12はコカ・コーラのロゴが見えますが、コカ・コーラの生産工場ではなく、小学校です。校舎が津波で壊れて、コカ・コーラの会社が再建したため、学校側が感謝のしるしとしてコカ・コーラのロゴを校舎にそのままつけたものです。遠くから見えるところに、しかもコカ・コーラのロゴそのものを貼りつけているのはたいへん興味深いです。

また、ホンダが再建を支援したのでホンダのロゴをつけた診療所もあります(資料3-13)。このようなものを津波ツーリズムの対象に含めるかどうかは社会によって違うかもしれません。今日の世界では災害が起こったときに自分たちの共同体内や国内だけでなく、

外の世界からの支援も受けて対応するようになっていくことをよく示しているため、私はこれも津波ツーリズムの対象に含めてはどうかと思いますが、アチェの人々はどう思うのでしょうか。

■ モバイル博物館構想を通じてアチェの 過去、現在、将来をどう語るか考える

このように、バンダアチェの町には津波の遺物や痕跡がたくさんあります。また、津波後に作られたものや、津波を契機に位置づけが見直されたものもあります。こういったものを含めて津波ツーリズムの訪問先として紹介するのがモバイル博物館の考え方です。その際に、どのサイトを入れるのかを選ぶ必要があるのと同時に、それぞれのサイトにどのような物語があるのかを語ることが必要です。

どのサイトを選んで、そこにあるいろいろな物語の中からどれを選んで示すのかは、アチェの人々とアチェの外の人々が協力して行う必要があります。それは、いまのアチェをどう語るかということだけでなく、過去をどう語るか、そしてそれを通じて将来をどう語るかと関連しているからです。このことについて、今後、アチェのみなさんとぜひ考えていきたいと思っています。

また、今日紹介したのは写真ばかりでしたが、写真以外の情報としては、音声や動画や文書などいろいろなものがあります。それをモバイル博物館にどのように入れるかも考えなければなりません。それについては明日以降、このワークショップで一緒に考えたいと思っています。